

Title	微小管タンパクに対するグリセオフルビン誘導体の作用(その4)
Sub Title	
Author	佐藤, 良博(Sato, Yoshihiro) 手塚, 貴子(Tezuka, Takako) 小田, 泰子(Oda, Taiko)
Publisher	共立薬科大学
Publication year	1982
Jtitle	共立薬科大学研究年報 (The annual report of the Kyoritsu College of Pharmacy). No.27 (1982.) ,p.102- 102
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	学会講演要旨
Genre	Technical Report
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00062898-00000027-0103

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

微小管タンパクに対するグリセオフルビン誘導体の作用 (その 4)

共立薬大 佐藤良博, ○手塚貴子, 小田泰子

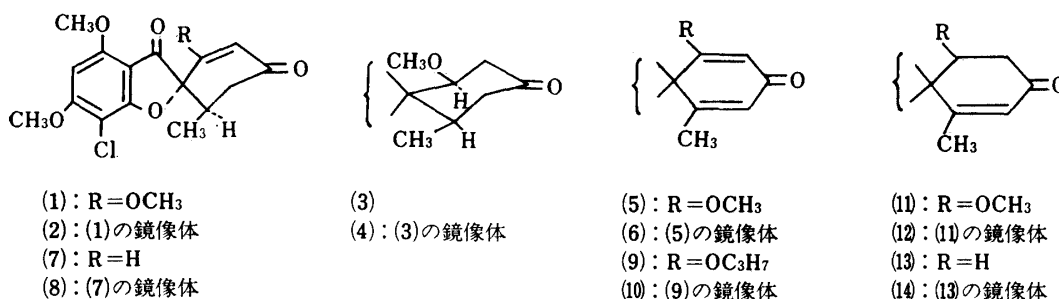
〔日本薬学会 第 102 年会 (1982 年 4 月) で発表〕

〔目的〕 グリセオフルビン (GF) およびその誘導体の微小管および微小管タンパクに対する作用については、一部すでに報告した [日化, 1981(5), 746]。今回は、主に鏡像関係にある GF 誘導体を中心に、これらの構造活性相関を明らかにすることを目的とした。

〔実験〕 微小管タンパクは、ブタ脳から解重合—重合のサイクルによって得られる部分精製チューブリンを用いた。GF 誘導体は最終濃度 $0.2 \mu\text{M}$ — $200 \mu\text{M}$ における粘度変化を 37°C において測定し、微小管への重合阻止活性をしらべた。

〔結果と考察〕 GF 誘導体は下図に示した (1)—(14) を用い、重合阻止活性は Control に対する粘度の低下度として求めた。

測定結果は、高濃度 (100 — $200 \mu\text{M}$) と低濃度 ($<50 \mu\text{M}$) とで活性の順位に逆転が見られる例があるが、結論としては天然物の (+)-GF 構造が極めて重要な構造であることが証明された。微小管に対する解重合活性または微小管タンパクに対するアグリゲート形成活性についても併せ報告する予定である。



WISTAR 系ラットにおける UDP-GLUCURONYLTRANSFERASE および SULFOTRANSFERASE 活性の年令差・性差

松井道夫, 渡辺 宏

〔日本薬学会 第 102 年会 (1982 年 4 月) で発表〕

〔目的〕 演者らは Wistar 系ラットが Androsterone (AN) に対するグルクロン酸抱合能に顕著な個体差を示し、その高 UDP-glucuronyltransferase (UDPGT) 活性が常染色体優性遺伝であり、親ラットの遺伝型から高活性 (H) 群および低活性 (L) 群に分類することができることを報告した。今回、AN 代謝の調節機構を解明する一環として、UDPGT 活性および Sulfotrans-